自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究(7)

伊藤 忠弘
(学習院大学文学部)

目的
他者志向的動機は、「支えてくれた家族や仲間のために」達成行動に従事する動機づけであり、「自分自身のために」達成行動に従事する自己志向的動機と対照される。これまでの研究は、①自己志向的動機と他者志向的動機はかならずも対立するものではない、同時に双方に動機づけられている者が存在すること、②自己志向的動機と他者志向的動機の両方を保持していても、両者が葛藤しているような場合と葛藤がなく統合されている場合があること、③自己志向的動機、他者志向的動機のいずれかを優先している場合でも、他者の期待に伴うプレッシャーの認知や他者からの評価されることの重要性の認知に差異が認められることが示唆されている。


方法
被験者 東京都内の大学生260名(伊藤(2008)と同じ)
手続き 伊藤(2004)の73項目について、自分の考え方でどれくらい一致するかを6件法で回答させた。

結果
ウェード法によるクラスター分析を行った。分析結果のデンドログラムを参考に、クラスターに含まれる項目の内容を解釈して、9つのクラスターを採用した(表)。

因子分析の結果と比較すると、①と②が第1因子(自己志向的動機の重視)と、③が第5因子(他者志向的動機 befindimweise)、④が第2因子(他者志向的動機の自己志向的動機への還元)にほぼ対応しており、この4つのクラスターが自己志向的動機へ向かう動機を表している。また⑤が第6因子(他者の評価が予想の肯定的な態度)と、⑥、⑦、⑧は第4因子(他者志向的動機の重視)と対応しており、この4つのクラスターが他者志向的動機への向かう動機を表している。⑨は第3因子(自己・他者志向的動機の統合)と対応しており、先の2つの動機性と独立して存在していた。

KJ法の分類と比較すると、『自分のため』に対する肯定的態度は、①、②、③と、『他者のため』に対する肯定的態度は、⑥、⑦、⑧と対応している。「自分の大事」と『他者のため』の相互補完には③の一部と⑤、『兜の動機としての自分のため』には②の一部、④の一部と⑤が含まれていた。「自分の大事」と『他者のため』の統合には⑨が含まれる。

考察
2つの動機の双方を重視し、統合を表す項目群が、自己・他者志向的動機それぞれを優先する項目群と独立してまとまったことは、「自分決定的でありながら、同時に人の願いに応えを求める自己に課して努力を続ける」といった意欲(真島,1995)という当時の他者志向的動機の定義からも、その統合過程に焦点を当てた必要性を示唆する。